

別府市就学前の子どもに関する教育等協議会

第2回議事録概要版

- 日 時 令和2年12月22日（火）15時～16時30分
- 場 所 別府市上下水道局 3階大会議室
- 出席委員 山岸委員 仲嶺委員 田中委員 伊藤委員 姫野委員
宮崎委員 園 委員 薬丸委員 8名
- 事務局 稲尾教育部長 中西福祉共生部長
柏木教育次長 月輪福祉共生部次長
北村学校教育課長 吉田教育政策課参事 志賀学校教育課参事
釘宮 穴見 重岡 石崎
- 傍聴者 3名
- 報道関係 2社
- 次第

- 1 開会
- 2 議事

(1) 第1回協議会協議の振り返り **資料1**

(2) 別府市立幼稚園の今後の方向性

①育ちの保障につながる1学級あたりの適正園児数・適正な学級数
及び市立幼稚園の適正配置 **資料2**

②保育年限 **資料3**

(3) その他

・次回について

- 3 閉会

■参考資料

- ・第1回協議会議事録概要版
- ・園舎築年数と建設年度
- ・他市の事例
- ・幼児教育施設における在籍数

◆議事

(1) 別府市就学前の子どもに関する教育等協議会について **資料1**

○事務局から説明

委員長：少子高齢化、女性の社会進出・働き方改革などの社会状況の変化を前提とし、市立幼稚園の方向性等を協議することを通して私立幼稚園や保育所の役割、質の高い就学前教育の充実について明らかにするということをこの協議会が使命として持っていることを確認した。第2回協議会では、子どもの育ちにつながる1学級あたりの園児数や学級数、市立幼稚園の適正配置、保育年限が協議事項となる。

(2) 別府市立幼稚園の今後の方向性

①育ちの保障につながる1学級あたりの適正園児数・適正な学級数及び市立幼稚園の適正配置 **資料2**

○事務局から説明

○協議

委員長：本協議会は幅広い視点から協議することとしている。よりよい就学前教育につながるようにという視点でそれぞれの立場から考えたことを自由に発言していただき、集約したい。

委員：1学級あたりの適正園児数は20人～30人でよい。30人を超えると少し難しい。1人の教師で30人を保育するのは負担が大きいと思うので、私立幼稚園では園児20人～30人につき教師は2名としていいる。また、1園あたりの学級数という点では、幼児期の特性を踏まえながら、環境を通して行うことが年長児にとっては大事なことであり、遊びを通して様々なことを学ぶためには、1学級より2学級あった方がよい。

委員：遊びの広がりというところから考えると、少ない園児より、20人～30人の園児がいたほうが、友達を見て学ぶことができるので、そのくらいの数がよい。1園あたり学級は複数がよい。教師の成長が期待できる。隣のクラスを見ながら共に教材研究して、子ども理解の仕方を学んでいく。例えば、ベテランと若手が組みながら…ということ、教師が力をつけることにより、子どもに還元されていく。そういった意味からも複数学級が望ましいと考える。

委員：一人一人がよく見え、また子ども一人一人にきめ細やかに対応できる人数はどのくらいかという点で、具体的な人数については、他の委員の皆さんの意見をぜひ聞きたい。ただし、ケンカになった時など、子ども同士で解決したり、別の友達から色々な影響や刺激を受けたりできると考えると、10名以上は必要であると考え。学級数についても、他の委員の皆さんの意見をいただきながら考えたい。

委員：具体的な数字や規模は先生方が話されていたので、そういうことになるのだろう。ただし、子どもを出発点として考えれば、どのような育ちを保障するのか、どんな保育をしたいのかが先で、そこから人数が決まるのではないか。『教師が集団保育でこんなことをしたい』、『そ

のためにはこのくらいの人数が必要だ』、『それが子どもの育ちにつながる』ということリンクさせないとまずいのではないか。そう考えると、集団を保障するといった時、5歳児における集団を年齢プラス1の6人とすると、1学級に10人だと少し厳しい。具体的に考えても1グループしかできない。2グループでも足りないから3グループと考えた時に15、16人はいないと困ると思う。国際的に見ると、8人とか15人、20人という国もある。どのような保育を目指すのかという理念があった上で、そのような人数になっているのだろう。子どものニーズや地域の環境の問題や保護者のニーズを勘案しながら、園児数を減らすなら減らすなりの保育内容、増やすなら増やすなりの保育内容ということセットとして意識されるとよいと思う。

委員：「適正」という言葉が難しい。グループ活動を想定すると3つ以上のグループができる活動が望ましいと考える。互いに子ども達が刺激し合いながら、やり取りしながら活動できるグループ編成を考えると、示された程度の人数でよい。1園あたりの学級数については、子どもとのやりとりだけでなく、教師間のやりとりをとおして伸ばしていくものが保育内容に還元されることが十分想定されるので、複数学級が望ましい。

委員：20人～30人は1学級にいてほしい。それ以上になると保護者としては、一人一人を見てもらえないのではないかと心配する。また、ケンカになってしまった時に別の友達とも遊べるくらいの人数がいてほしい。

委員：長子は2学級、下の子どもは1学級となった。親としては両方メリットがある。2学級の時は活気がある感じを受けた。1学級となったからといって寂しいのではなく、アットホームに感じ、幼稚園児全員が見えやすいので、両方よいと思う。人数は1学級あたり20～30人くらいいる方がよい。

委員長：ある程度人数がいると、ケンカして友達と遊べなくなった時にも他の友達と遊ぶことができる。集団から逃避する必要がなくなり、集団の中にとどまっていられる。そのようなメリットはあると思われる。一定人数必要だというのは皆さん一致したご意見だったと思います。教師同士の学び合いというのも良い視点だと思う。

委員：小学校でも同じで、1学年に複数学級あり2人の知恵を出しながら、学級経営できるのは強みとなる。1人の教員でその学年を運営するのはかなり力量がないと難しい。複数人の教員で教育・保育にあたることのできるのは強みである。

委員：人数は皆さんが言うくらいの人数が適正なのかと考える。一定のグループで何グループか作った時に、一定人数がいなくて学級運営が難しいところがあるので、参考になった。

委員：我が子の学校は1学年1学級だった。互いに比較するものがあるって、初めて学び合える。そういう意味では複数あった方がよい。単学級でも先生が2人いるというのもよい。西南学院大学附属幼稚園は30年前くらいから1学級2人体制で、特別支援に力を入れている。2人いることで、いろいろな子どもに目が届くということで、実践を重ねられている。保育の柱に向かって保育するためには、これだけの人数と人手がいると考えられていると思うので、参考にしてはどうか。

委員：新しい先生をどう育てていくかということにも私立幼稚園は力を入れている。新人の研修会は公立はたくさんあるが、私立はあまりない。これを解決するために、ベテランの先生と新人で組んで、一つの学級を運営している。ベテラン教師の保育を見たり、教えてもらったり、話し合いの場をもてたりすることが、新人を育てる一つの良い方法ではないかと思って取り組んでいる。すると新人に次の年は頑張ってみようという気持ちが芽生える。ベテランの先生も新人から得るものがある。2学級の教師が今日の保育について合同で話し合うことで、子どもの遊びが進む。振り返りをする時もそれぞれのアイデアが出て、とてもよい。

委員長：出てきた意見で共通しているのは、複数の学級が必要。最低でも2学級が必要ということである。「適正」という言葉の定義はとても難しい。70数年の歴史のある就学前教育・幼児教育で積み上げられた様々な技術や方法や理念を踏まえて「適正」ということを適用していかなければならない。そのように考えた場合に、園児数は20人～30人が妥当な線ではないかという意見である。どうしても事情がある時、20人を下回ることがあっても、保育内容をきちんとしていくことが必要であるという意見をいただいた。

次に、市立幼稚園の適正配置をどう考えるのかという点です。20人～30人の学級編成ということと、市立幼稚園の現状を考えると、適正配置を考えなければならない段階にきている。これは第1回協議会の中でも資料がいくつか出されている。現状のままだと適正な人数を保てない。配置をどうするかという、非常に難しい問題だと思うがそちらに議論をうつしたい。

委員：初めにこういう配置がよいという結論ありきでなく、少子化の傾向と保護者のニーズとともに、『ある程度の子どもが集まっていて、複数年保育が理想』という幼稚園のあり方を考えていった時、おのずと「適正」とは何かということが出てくる。

委員：地域の中でも様々な事情がある子どもがいると感じる。地域性を配慮し、地域の保護者が困ることなく通えることこそ、大切なことなのではないか。市立幼稚園が地域のセーフティネットということに関して役割を果たしたい。どの子どもも質の高い教育を受けることができるように地域性を配慮した配置が適正なのではないか。

委員：地域性は無視できない。別府は山と海、北と西でもだいぶ違う。単純に地域割りをするというわけにはいかない。地域によって保護者の家

庭状況も違うだろう。地域の特色を踏まえ、市内を一色に染めるのではなく、様々な幼稚園があってもよい。人数が多くて活動をする園もあるし、個別の対応をするところがあってもよいのではないか。どんな保育をするのか、どんなニーズがあるのかを踏まえながら考えなければいけない。保育所が特別支援の子ども達を受け入れる時に、拠点方式だとなかなか通えない、預けられないということがあって、どの幼稚園でも受け入れるようにということになっている。地域で歩いていけるとところにサービスがあるのが大事。通えない人が多い地域はどうするか、そこを考えないといけない。一律にローラーをかけるというわけにはいかない。

また、将来に向けて人格の土台をつくるという、根っこをつくるところが幼児教育である。根っこをつくらずして幹も葉もできないだろうという議論は今の新しい幼稚園教育要領の根幹である。それは公立、私立、こども園関係なく、地域にあるすべての就学前教育施設が同じような内容を提供できるようにするというところで、幼稚園教育要領や保育所保育指針が作られており、そこをどう担保するかが重要である。

委員：大分も別府も同じような傾向でないかと思う。少子化という中で保育需要は上がっている。母親が仕事をしている子どもが増えたことで、保育ニーズが上がってきているのではないかと思う。その点で、市立幼稚園の場合、預かり保育を全園がしていない。預かり保育をしているところに多少子どもが入園をしている傾向があり、そこで子どもを確保するという方策をとられているのかと思う。別府でも大分でも、地域にある幼稚園という色がこれまで強かった。だからといって園児が集まっていないのに園を存続できるのかということ、それは非常に難しい問題である。平成元年の900人在園児が令和2年には400人となっている。園児数が半数以下となっているのに、同じ数の園を持っているということは考えないといけない問題である。その中でどう地域性を大事にしていくかということと同時に考えることが必要である。地域を大切にすることというのは、地域で子どもを育てることにつながる。そこは別府のよさを出していけないのではないか。

委員：先日 PTA 連合会の会議で本協議会の報告をした。現在16人～53人の園児が生活をして、どの園も集団として成立している。地域性を見てほしい。一校一園制はみんなの希望。小学校の兄と一緒に通うことや、接続する小学校の5年生と一緒に活動をするといった取組は大事にされているという話をたくさん聞く。

委員：PTA 連合会の会議では、各園の代表の保護者と「なぜ公立に入れたのか」と話をした。「地域の幼稚園だから」「幼小連携ができていから」「小学校と同じ敷地だから」という理由が多かった。一校一園制は続けてほしい。人数が少なくなってくる園もあると思うが、複数年保育にすると学級が増えてよいのでは？

委員：私立幼稚園は全国規模である。公立が多いのは大分県。福岡は公立が33、私立が397。佐賀は公立が8、私立は46、長崎は公立26に対して私立幼稚園は84。宮崎は公立は13、私立は80数園ある。

大分は公立が114で、私立は62。でも、園児数でみると、私立は6230人、公立は2445人となっている。九州内では、沖縄県と大分県は公立が多いが、あとはすべて私立が多い。全国で見ると珍しいのが大分県。保護者は幼小連携が気になるころだろうが、知らないことも多いのではないかと。私立に対しても、小学校はとて力を入れている。自園では園児と小学生が学校で一緒に活動をしたり、地域の活動も地域の方と5年生と一緒に田植えをしたりする。地域的な活動はしている。幼小連携という面では公立とあまり変わらない。私立幼稚園ではそれぞれが行く小学校が違う。校区でない小学校もさらに受け入れをしてくれる。その辺をあまり気にせず私立幼稚園に来ている保護者はたくさんいる。その事実を知ると「それだったら」と思う人がたくさんいる。

委員長：先ほどのお母さん方の意見で幼小連携ということ考えた時に、1小学校1幼稚園とある意味目が向くが、私立も全く不可能ではなくて、公立と同じくらいに卒園後入学する近くの小学校との連携をしているということです。

委員：幼小だけではなく、幼小と保の中で、小学校が受け入れてくれているので、子どもたちも何度もその小学校に足を運べる。健康診断や見学、さらに近くの小学校も受け入れをしてくれる。地域もしてくれる。今はあまり気にしてそういうことを言う人はいなくなってきた。それだけ公立小学校の先生たちが力を入れているだろう。

委員：大分県教育委員会も、小学校に対して隣にある公立幼稚園だけではなく、私立幼稚園・認定こども園や保育所とも等しく幼保小連携を図るような取組を進めている。小学校長として、「最近そうだな」と思った出来事があった。先日小学校の5年生と隣の市立幼稚園の子どもで芋掘りをした。来年入学した時に1年生と6年生というメリットを生かす意味で、5年生と幼稚園との交流活動は別府市内でわりとよくある連携の一つである。芋掘りでは1人の園児に3人の5年生がお世話をしていた。「5年生、今年一緒に芋掘りをした園児が入学してくるからよろしくね」と言ったのだが、5年生は「他の子がたくさん入ってくる。5年生3人で園児1人のお世話をしたが、ほとんどの5年生は違う子のお世話をすることになる」と言われ、「なるほど」と思った。昔はある程度そういう理論が通じて、5年生のうちに幼稚園児をお世話していればそのままペアを組めて、いろいろな活動ができた。今はそれが通用しない時代になった。他の園からたくさんの子どもが来る。だからこそいろいろな就学前施設と連携を図らないといけない。入学した後は、6年生から1年生までが仲良しグループの縦割り班を作り、これまでの幼小の連携の枠組み以外で、6年生が1年生をお世話する。時代が変わってきている。もちろん、お母さんたちが言うように通いなれた道であるとか、通いなれた施設であるとか、嗅ぎなれた空気であるとか、そう言ったメリットは当然ある。

委員：市立幼稚園に入園前に保育所に行っている子どもが8割くらいいるのではないかと思う。そういった点でも保育園やこども園との交流はどんどん深めていかないといけないと感じた。

委員：保護者の方は地域に住み、その地域で就園し、そこが知りえる幼児教育の情報だと思う。大分は実は公立が多い特殊なところで、他は私立が多く小学校に併設している一校一園でないことも初めて聞いただろう。ただ、現状が公立は平成元年と令和2年を比較した時に半分以下になっているのにも関わらず、園数が変わっていない。学級数が単数になっている、1学級の人数もなかなか集まらないところもある。その現状を捉えて、統合などすることが良い方向に向くということ、地域性も失われずにきちんとよい方向に向かうこと、保育内容は集団として保障されることなど、変わることのメリットをきちんと示して、改革を進められてはどうか。

事務局：幼稚園教育とは原点だと思う。幼稚園の様子を見た時、子ども達がケンカをしたり、いろんな駆け引きをしたりするのを幼稚園の先生が見守っているという姿がいいなと捉えた。ただ、グループが1つよりは2つ、3つある方が、保育の最後のそれぞれが発表する姿などが見られる。委員の皆さんが言うように、1学級に20人～30人いて、グループ活動が2つ、3つないと、なかなか活気が生まれぬのかと思う。もう一つ気づきがあったのは、先生の質を高めることによって子どもに対して学びを保障するという点である。そのためには複数学級必要と聞き、それはその点から考えても公立幼稚園は厳しい状況だと思う。再三指摘があるように、平成元年900人から令和2年には400人に減少している。現実問題として30人を超えたら学級を2つに割らないといけない、1学級が15人～16人となることや、単学級で20人を切っている園もあるという現実を見つめていかないといけない。その一方で、適正配置の話であるが、地域性についてはこれまで地域にある幼稚園という特色を別府は大事にしてきている。別府市子ども子育て支援計画では、地域によって定員割れをしたり、地域によっては定員が増えて教室の確保に苦慮したりしないように、全市を一区にしている。適正学級と適正配置の難しい問題を解決する時、ここをベースにして考えながら、その中で園ごとの特色を出すことや、通いなれた学校に行くという地域性をどうやって出していけばよいかをこれから真剣に考えていかないといけないと思う。また、未来に向かってこうすればこのようによくなっていくということを示すべきだという意見を聞き、行政として考えていきたい。

②保育年限資料3

○事務局から説明

○協議

委員：市立幼稚園の全部が複数年保育をする必要はないが、別府は単年保育のみなので、どこかの園でも複数年になればよい。以前、保育園の先生たちと0～5歳児の保育について研修した際、別府市の市立幼稚園の先生を誘った。0～5歳で保育を語る中で、市立幼稚園の先生は5

歳児の保育しか経験がないので、子どもの姿の捉えをする時、視点が異なり議論が深まらないことがあった。そのように考えると、4歳児は幅広い発達の様子だと思うので、1園でも4歳児が入れるような園があると子どもにとってもよいし、教師の子どもを見る目が変わり、保育内容にも違いがでるのかなと思う。

委員：1年だと子どもも教師も失敗したら終わりとなってしまいます。子どもは「来年がんばるぞ」と思っても小学生になってしまいます。そんな意味でデメリットがある。滋賀県の大津市では障がい児は3年セットになっている。0、1、2歳は通園施設、3、4、5歳児は保育所や幼稚園。そこで保育を保障するという事になっている。3年の見通しをもって今をみるというのと、今しかない中で今をみるのでは違うのだということは40年以上の歴史の中で成果として確認している。幼稚園では、3歳以前の発達が分からないので、保育園やこども園に行って研修しないといけない。0歳はこうだな、1歳は、2歳はこうを踏まえて、今自分のクラスにいる5歳のこの子の発達はどうかという発想ができる。また、5歳児は幼児教育の最高レベルで卒業して小学校に行くが、3、4、5歳の積み重ねがあってこそである。いきなり5歳保育だけではなかなかそこまでいかないだろう。なぜ今まで1年保育がうまくいったのかということ、いろいろな子どもたちが周りにいて、地域や家庭で担保できたからだろう。地域が支える力があるからできていたが、今はそういうところが薄くなっている。社会的な教育・保育を担保しないとけない。大人の責任である。

委員長：学年の進行について、上に行く程、下を気にすることができる子どもを育てるという意味では、1年保育ではできないことが複数年保育だと可能となる。教えている教師側にしても、2年とか3年の子どもたちの様子の変化から自分の指導はこれで良かったのか、もう少し別のやり方が良かったのかと振り返ることができる。

委員：幼稚園の園児に限らず子どもの成長や発達は連続している。つながりでその子どもの育ちを見るのは大事である。この点について園長として言うのなら、市立幼稚園の保護者の方も1年ではなく複数年の方がいいと効果についてはお考えだと思う。

委員：複数学年あるのだったら、それはその方がいい。公立が複数年保育だったら、3歳、4歳から公立に行かせていたかもしれない。公立幼稚園に入れる親は1年のために園服や用品一式を買いそろえる。1年でも長く使えれば助かる。また、公立を希望する方にとって、預かり保育が充実していれば、保育所に残すよりは、公立を希望する保護者が増えるのではないか。

委員：自分も保育所から1年のために公立幼稚園に入れた。預かり保育があったからというのが大きな前提だったので、その充実は大事である。また、複数年保育だったら楽しいだろう。もう少し成長面を見ることが出来る。保育園は預けっぱなしになった。幼稚園は先生といろいろな話をするなどの機会が多いと感じるので、子どものこともたくさん知

っていけるし、子どもの育ちにかかわることができる。

委員：私立幼稚園は3年保育を何十年もやっていて、さらにその下の就学前の0歳からの発育をしっかり見るための学校をつくりたいということでこども園が始まった。本当は0歳からの保育をしてほしいと言いたいが、それはとても大変。4歳を受け入れる体制をつくるにはとてもお金がかかる。施設面で途方もない莫大なお金がかかると思う。3歳となるとまだかかる。座って過ごす生活になるが、それを今の古い園舎で小学校の幼稚園となると、保護者も躊躇するだろう。3年保育はよいと思う。子ども達は学び合い、伸びる。3歳は4歳を見て大きく成長する、4歳は5歳を見て育つ。5歳は自分たちが一番上だからみんなを引っ張っていくという意識が芽生える。絶対に2、3年保育は大切だと思う。ただ、これをやられると私立は大変なことになる。

委員：自分は私立、国立で8年間、3年保育を経験した。少しだけ子どもの育ちの楽しさをわかっていると思っている。3歳未満児は自分の子どもの様子しかわからないので、勉強したい。楽しさ、喜びを知っているだけに、ぜひ複数年保育ができたらと思う。カリキュラムの面からも、2年、3年で長期にわたりゆっくり、子どもの育ちを見つめ、今の保育を来年度に活かしていく、そこから小学校へつないでいくというのが理想だと思う。

委員：複数年保育が非常に効果的であるというところは皆さんで一致している。他の委員も言われているように、私立の幼稚園、保育所がたくさん別府市内にはあるので、そんなところに配慮しながら複数のことを考えていくことが必要である。また、公立幼稚園は老朽化が進んでいるところもあると感じている。そんな問題も抱えながら、統合して園舎の建て替えを計画しなければいけない時期にきているのではと皆さんの意見を聞きながら感じた。

事務局：参考資料で公立幼稚園の園舎の築年数と建設年度を示している。複数年保育がいいけれども、当然衛生面も違うし、環境に非常に課題があると言われると、そうである。別府市内の幼稚園舎は築40年以上が半数を超えており、ハード面の問題も避けては通れない。保育の質を上げながら提供していく時、ハード面について別府市は問題を抱えている。

委員長：1年限りではなく、複数年で幼稚園教育をしていくことが理想的であることは一致している。多くの保護者は1年が普通で、慣れている現実がある。そのような人たちに無理に2年にするという事になるとまたいろいろな問題が出てくるので、丁寧に説明をしていただきたい。複数年になることによって教師の研修や保護者との磨き合いなどのメリット、子ども同士は上の子どもを見ながら切磋琢磨しながら学ぼうとする点から複数年保育の重要性というのが同じ意見だと思う。市の方で充分検討していただきたい。

事務局：園児数、学級数、保育年限、ハード面を含めたところの適正配置というのが、すべて関連していることがよく分かった。一つ一つ分けて考えるわけにはいかない。また、本協議会でこのような話ができるということで、非常に感謝している。保育年限の話について、民間の方と公立の方が入っている中で話をするのが難しかったという状況があったと思うが、こういう形でオープンに議論できるのは非常にありがたい。いずれにしても地域性の問題も含めて、別府市全体での大きな目的は、0～5歳の就学前の子ども達に対して学びを保障すること、幼児期の子どもに対して教育と保育を一体的に提供することであるので、市立幼稚園だけが良ければよいという問題ではなく、別府市全体の最適化を図っていかないといけないと思っている。今日の議論を踏まえながら進めていきたい。

(3) その他

次回は2月を予定。案内文は後日郵送する。第3回は皆様から、質の高い就学前教育等の充実に関することについて意見をいただきたい。